

士朗五七集



士朗五七集目錄

卷の巻

留与懐紙

落梅花

麻うり

菊枕集

於すなは亭

松と磯



武の巻

法く義經  
山吹集  
名かー鳥  
花橋集  
橋日記  
蒼の眼  
飛少々々  
松砂炭  
玉之ー草

三の巻

三日月集  
玉笈集  
庵大集  
婦皇局日記  
飛波婦々集  
閑古鳥  
名かー草

四の巻

笛集

穉夜集

宇良かゝり

葦つゆ集

飲中八仙歌

長壽樂

五の巻

本仇つゝ

きん糸うゝ

泣瓢集

養虫集

玉兔集

柴の戸集

文化五歌仙

苗吉懐紙

河縁喰ふと、舞れ、謀の浮素

ぬとんるる、写る目そるるる月

山本の土すわく、と、雲の風とえと

土器作り、筆の静、を、

者、うち、福、多、能、の、古、姿

家持、る、姿、あ、ろ、ハ、行、の、花

と、ふ、者、の、あ、ま、の、ゆ、と、して、ハ、能

緒、有、ま、を、と、く、人、あ、り

朝鮮の史、と、ら、ふ、布、玉、寺

士朗

桂五

岳格

他郎

五

朗

郎

務

朗

完備の松をよみし  
 秋の月何よりなるか  
 茶の心も子物もよみ  
 面をの梅清はまね  
 らぬまにわしはれり成  
 野の松の流しはなれ  
 雲の心もよみし言  
 吉原の華一は出は  
 流るる流るる流るる  
 子自覺もよみし  
 鳥籠の心もよみし

五  
 郎  
 五  
 郎  
 拾  
 郎  
 五  
 郎  
 拾  
 郎  
 五  
 郎

柳十歌下五

任君舟はなれり  
 芥子の柳舟鳥人  
 夏衣子の子物もよ  
 中一の母の心もよ  
 徳をよみし子物も  
 夢もよみし子物も  
 鶏鳴もよみし子物  
 蛸を捨つてはなれ  
 玉照の心もよみし  
 舟の心もよみし子  
 山藪の心もよみし

五  
 郎  
 郎  
 拾  
 郎  
 五  
 郎  
 拾  
 郎  
 五  
 郎  
 郎

落の望出に如滅光えんを  
あふも又宗旦瓶つひわたり  
とくもあきけは風くわく也  
さへ矢射る東の名の香に蒼ま  
酒屋のうら枯柳見より

將 朗 五 蔭 郎

ゆふ山や時魚は厚結啼くられ  
及舟さびく漕つまよるり  
のくくく梅の来雲々年取を  
さのそちやけに正月の月

毛 周 五 蔭 白 國

秘七劫初下矣

春の風弱の如く向ふをり  
賣らくハ伯父の 大 殿  
はぬけぬ障子明色ハ檀香  
杉脂落るはまきくの西  
忍び合ふ帯けくく美と白挿  
あまりの確む子のふさくも  
尾波坂や雲を風といふ不  
椀豆のまきと豆と一 啼  
都の月なりりの眼濃きあま  
榎板屋をく之井寺の秋  
こく酒罌をくく恒細く

城 毛 周 滿 國 城 毛 周 滿 國 城

難ゆよ志うそんか  
すけしるを花咲くは雲霞  
撫櫃の木の子のかしき  
かけんふの備へるる誓の春  
垂垂と先ずひ信の恋の病  
ゆへに花の明をさすも世に  
杯の花を玉四月にさす  
魁下村は花を風山  
おとひふは花柳をせん  
儂徒を現ぬしとて海  
心極高ふとてかしの面

毛  
茶水  
夏畦  
園  
満  
周  
城  
毛  
水  
畦  
園

瓶七秋初要丸

網曳する春は雲を海向  
ぼよよと世に花をぬり花を  
と食の好むを語る花の月  
豆栗の中へ花を橋つた  
雑字く門田の木の細か  
漱多ふよふと花を柳にさす  
今年のもをいふと花を  
むよ花をさす花を  
は生少花をいふと花を  
花を病の花をいふと花

満  
周  
城  
毛  
水  
畦  
園  
満  
周  
城

雪のふり板あをきるるの 面  
 菘すき録さつけゆは 月  
 けり月の能くさあの方を基て  
 桐のさあ木のあつて形くしり  
 神明小社とてあつて西の山  
 小家のそけハ踏塔を 汲  
 あとうらハ彦根の後の山あて  
 傾城おろるるあの子ぢ 出  
 明早やあハ定めあきたるあ  
 あ言をくく漱まくゆあり

桂東  
 狙乃  
 士朗  
 古成  
 乃  
 裏  
 朗  
 戎  
 裏  
 乃

枕七次初五十一

高心寺の男お人よ酒の免ハ  
 向への堂院大々吼 つき  
 有明ハそ建の臨の白木権  
 何々降くもこれあ秋  
 天社の音居よりあ居の糞  
 日これあしりあ刀の番は  
 馬い助をさうくあくらあ  
 小船の現ああ

朗  
 戎  
 裏  
 乃  
 朗  
 裏  
 乃









天の壬寅十一日

落梅花序

暮雨巷乃大人也一日江都の春を  
恋し起その水の流ひもつらう達梅の  
閑守人もん志をくりのあきくひま  
せんありふたはされい去手のあまハ  
五周を俱しく若狭の玉よりわたり  
あまみずり家又落葉経へいあまひち  
うきく心をよする人ごとくあまを  
そりりて白山通三象のあまひちの  
あまをすうけく師の梅をとくあま  
うつあま咽喉を痛む患あれいあま

あつらふ保身法をも加へさせ給ふせん  
なり終り事なりりらむハ病つと扁額  
ト居のかまを催ま日ハ十月廿七日なり  
志ありありと門をふ日くよ志あり  
風候悪くよかほすまハ五周も今ハ  
公易と候を乞ふ願ふゆり  
候を時多きき霜言月十日  
候よりをう候も喉のいこを日  
倍しと食道をれふこりもてけハ  
物を通すき術をゆらむらよ  
あつらふみくはわき廿二日といふ日

咽を結余海をといふハ彼老和尚の  
杖杖なり余ひさしく病はく  
よま折海をいふと苦痛する  
車十餘日まなくつとなく  
今ハ葛の細尾の細きかきり余  
かたはとのとてはまつらよ  
咽ふら

冬ハ終りき世の道ハ絶く  
と昔き中よ字ハ病をきひ  
まはし鼻うまかつては  
かきりなむハやひそく又尾張の

人くよひのちりも多に廿九日附央のちり  
来る也く始下りれ事ともかじりゆのこ  
ふこい良醫を尋ねてとて免く療養  
あつををすすとよもきく程をす朝と  
阿け夕とくねくはゆく河乞のちり  
うはりぬあは小林良沖の家三世乃  
業をつまこしゆ此門は極ふ乃徒免ハ  
他不誠て肝膽をうさ地方術をすす  
ま誠心や通くきん病いゆくちり  
みくく粥をく進るはゆりも事  
すきやうすゆい人もきき始てん

落居たるやう多きと程もたのちり  
あふくくふむひく佛社の擁護をたむ  
七日の朝雲の障多ゆふよりもゆよ  
ありきん障子ひくをうさかんちり  
あふく雪よ報うつちりもむつち  
あふく雪よ報うつちりもむつち  
あふく雪よ報うつちりもむつち

出経つふふ

うのすくかんをきく山鹿のち 芦涯

新皇の賜を所仰くありありふんも  
あひくよむをゆきやみよ一巻の歌仙と  
なりきり

折りゆく屋張の必しりも休しと

雲は空を横ぐお生かすきりか 士朗

此白を新袴の始とてあかく丹織を

拙てたるか一卷のまゝのを送る山川

卒軍を隔あうとも同輩の誠心誓合

しとね効りりかさく笑うふ了を神カ

おほよそやとくをせしとてふるは北野の

聖廟よむきえんく使儀を祈りなまふ

此日病顔涙節とて喜はりあうす

再生の妻を唱んあんなちもとらう

やまうれそとありとて歌をいとうせしと

七三三

悦ひあつちあふりおけ事なむのんく  
若まやとと脚尖ハ馬を飛勢ていせし  
あふり十日と薩六の完而く許より流り  
あり字色のいせたりんせしとあしと

神あきや起い雪の三百里 完而

そ圃の門人同用句を伝てねて送り  
事はよ自ら吹しとて其悦のあゆぬ  
喜を感しんくもも聞くと悦しる  
顔うらりけありはきより氣力りくふ  
かそりくくそそ身せハ良安路の肩を  
おしきりあふ山嵐月一籠の志しと

梅の東へ秋謝して閑えき花やう

予々病を憐みく園中又散種の花  
を挿て起明を垂るらる甚白ひ  
つとふらるる露のきくをるをす  
見るとより路のそとほり胸のあつ  
さも涼くめはむるを繼のすきハ  
いはいり草をもとりつんとするよ  
つけてても母もひよりぬ津や輞川の  
画圖をひききて病をワききたるも  
はふさる事そり先水のひ手  
をうふさるきたる先ふハ夢の巻も

志のなまれと杜あめの何ワをれ花もなく  
勝るすぬ色もよそを程もよそハ  
ひらき梅よ菊をふハ書林の子代を  
きうへ家うそが花あち物あく一室  
をうへ大よみふれとも花一箇も四季  
をこえくさる梅く梅もよ

鬱延枕と盧生夢 蝶舞机辺 莊子魂  
あつる花やりぬることの夢もいづれき  
折うへ梅木の干當事うへ者あつ画  
時高の一種は梅を乞

巻のなまれと梅あめの何ワをれ花もなく

たうちまわいつけわたさず病中の予より  
白濁りたのくはのあさくはよの哉も  
そよふふうく門人の徳を郵一あふ  
あやとくささく感くもあやのあり  
くさ事よせん一日

二条おとより片健初の日かよ病床  
を下りくあつき 作ををあくこま  
まり道の業ある変をありくこり  
給へあまも言ぬ明れハ昔傷の光  
まきくくくくく一天中こふまらひ  
給ふよらの朝より大人誠意ちんく

水うらひをくくくかきく芦雁の  
乞ふとく文屋の表書をものあふ  
そら書も名あふかきくみゆくく  
くく給とくくれんらよま書屋の舎始  
たすくは百池名をとら

この書朝ハひときくくくあをりて  
ゆくゆき民の暮らうちをよま言の  
あやあはれもよはくあふもさきく  
あまきくくくくくくくくくけき  
おあむをくくく

皇朝くくくくくく

玉簾よききりしをばくせんさあうと

十二日例の詠へる春の集りて集るる時松を  
阿け

梅鉢よ春のほころや唐草

阿の白を葉しけり人々の海印  
おる介抱よきて日あはれ金使す  
いらいや世の事かあはれしを  
よき法楽の俳諧をんといひて  
あーたもまことの夕もよけりわが  
さるすり十九日え草山南の菴の  
文書をもて免をれハカク

たち出んとすもふも帰るも  
松よこけ沸く糸物一途を帰る  
くちよき出ぬを秋田文の程ふや  
あまむむさしの戸をあきりまたく  
能く見らふ松の僕の志助なり  
大人の病危篤なりといひまをり  
あまむさしをき能くハカク  
ちよめ良冲芦涯湖美其成等  
空若き志松よきておたり  
おはいうふと師の身をつくすり  
松樹系りたりと高きよ若くれハ

廣く唇うき記ふこころまたる女眼より  
涙をしくと薄らぎみくし紙け世は  
名跡ありし御面の阿しはえうら  
言はれぬもさしゆきいさうかさも悲し  
さもいそんうらなくたくのむらも勝を  
やうり割いあまの天なりあうきいあう  
相府よりたくあふふいひやうちうらなき  
明言ふいしり廣歎やうのひうきは  
きしりききのうらめの四口 雲極四葉結  
南大雲桂舎よ華送乃式を執りひ  
きしり追福りねもこれもおやしき

追福りねもこれもおやしき

うきりを福もくうまいとをこはく目を  
かきく月を隔て今いむしりあはれを  
つとふ葉裁不朽の恨をきし事よハ  
成ぬ嗚呼吾翁の後を沙りりて  
其時秋葉よしきこま人を回しうら  
惜むしりあまよしきあまを極りぬら  
成りまはあしきしり座右の湯葉よ  
ゆりしりあまよしきあまを極りぬら  
かき半しりあまよしきあまを極りぬら  
ゆりぬらあまのたくの門下の人しり  
追慕伝長の俊やうしり師う後馬の天概を

万こころをなくかひけ

乃木

寛政四年三月

月人

曲江亭桃睡涇血書

桃睡

追悼  
俳諧之百韻

新あゝいもせしは草一  
花はあゝなかり岩の雪解  
小貝ふむまの洲邊よ約とて  
ゆら心掛弦を引むをひぬ  
長くと鞭をう地をうち出  
やうやう火とをる氣多すしき  
あもとのしり松東はくみ草  
ませまゝそのかゝるを急へ

桃睡

百池

蘭更

嵐月

湖羹

一峯

芦涯

其成

鳥の垂ををのつくと風の吹はじ  
 昨日の夢ををを黄ふゆめ未  
 春の宿ハ新河船のよき名  
 水をあふふる鳥のたをを  
 山くくは山の志のく免鳴渡り  
 本音の鐘梅元とあををれ  
 凍れはれは味方やたり  
 新酒ひくまをを後時をを  
 日わくく月の光りは梅りり  
 空をををををををををを  
 たりりやひくくくく國をを

佳棠  
 朱玄  
 葛巾  
 慈周  
 五雲  
 雷夫  
 如瑟  
 子直  
 紫曉  
 東湖  
 月峯

手くむ佛のやまになりはあ  
 花ちりく楕のやまのまま  
 直宿下りのくちとけり  
 大凡中のうをりは眠りま  
 雨はくくくくくくく

蓬洲  
 不木  
 士卯  
 不朽  
 五周

右一頰下畧

追悼

前書をのく略

ちくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくく

嵐月  
 湖羹

身は深き水に新も七尺の朧月  
帰る人かたきこもあはれ  
あけひはり此意をまよはし  
おぼのまもきのおそなる且く

朱玄  
一峯  
其成  
百池

初七日

おれのおりし師の病中  
口のめりくもめられ算のうき  
氷初降乃に氷をへ作り  
しうくふはとうき関伽水  
をなるとて

桃睡

氷とけくあ汲くうう  
鶴よかききま指の梅  
鳴鳥のつとま新や能ひえ  
相恋賦に記すの 一付  
はあより月乃名示ありや  
家こまは海の雛まつりり

嵐月  
湖羹  
芦涯  
朱玄  
其成

右一頰下略以下効之

二七日

梅うま  
とくくまらるるし力をき春

芦涯

桃睡

ほろくくと連き日影も暮るる  
月あふみのの瀬をいつくし  
雄の風程むとあるこのく下  
破よりけるまの

三七日

津海船とまきほらまきし似巻か  
沙汰腫のりけむうふ月  
大勢乃人よりまきの色もて  
巻帆くし帆は船ハ出てし  
巢のまの巻をえうりし伸き  
日のあふつけいふ家かくし

嵐月

湖羹

一峯

其成

百池

湖羹

桃睡

芦涯

嵐月

朱玄

四七日

情とねもひはく星日の春の夕  
御ををやうつ 晴  
たまり水小浪七果は打寄て  
百間をうり懐ひきまきへ  
みくし巻の月明くる家人の影  
聚いなく窓の

五七日

情くもえも化なりまきを履  
くまの 又海くの家 舟  
解たるくまのりまきほらまき

嵐月

一峯

湖羹

桃睡

芦涯

百池

湖羹

芦涯

嵐月



追悼をのく 詞書略

ちうくくや解ぬよ結ふまの夏  
春あちりて白ひるりや墳の花  
なうれりくくくくくくくくくく  
神さしむる影も白ふ梅の風  
儂をさもふ春月をたちあつ月  
散梅の花 嘯む物との思ひは  
梅ちりくくくくくくくくくく

紫暁

桃之

佳棠

如瑟

定雅

車蓋

月峯

あうあを疎くくくくくくくく  
頂立や傍又空き沙曇り

宇治 麟路

黒 毛條

光あわれきくくくくくくくく  
春の風 物多し似たるわくたが  
回向せし春も白ふ法の心

青阿

土卵

長 晋鷺

情む心のほとふるつくとぬり

不朽

三りや終百日の夏志き

白黛

窓くくくくくくくくくく

駒丹

花解してくくくくくくくく

雷夫

喚聲又日言なりひややくきす

眉山

時久くや蓮催才水 一寸

城 下方

唱入るるをさるるなりなりとて

貞松

花はよみわふきふたむなむひ

文昭

あすの美をとりし初めれ

大和可翠

夢にあらうとぬ道は誰とて

藤来

曲江亭の古言は師の物語を

夢にあらうとぬ道は誰とて

夢にあらうとぬ道は誰とて

夢にあらうとぬ道は誰とて

蘭芝

夢にあらうとぬ道は誰とて

右稻

梅ありとての白ひもたふのこ

奔陶河

うらひすも今いそしきとて

百馬

花はよみわふきふたむなむひ

左橘

世のしるや解とて氷はとよ水

臣川

此夢や雲雀なく日の怒りま

鬼雀

すつうのゆらぐはさきよ

丹波 武陵

心はほも罽九日の初 橘

一巢

あそあそこの橘は初夢を

翠寶

志はくくは流るる夢の心くれ

暮夢

新たのむみとり涙とて夢を泣

高布舟

員武



と京の喜よ免とけりあらし

可能

予もたもきよいつきよふして

新うらふる身ともあふるに坊

廿二ハ

ともうくもねるゝ身見む其の月

玄免

四月廿九日

百箇日 於大雲精舎興行

俳諧之百韻

廣明

新志ふ志るゝの松子喜ぶし

月の月うつる多路の夜子

桃睡

賭的の対わけの一色えけむえ

不木

ふとときよき人をうりあり

百池

岨里ハみれ山水よ作なれ

芦涯

やうの名跡の女所くれふる

湖美

わくもなく歩り出さる目と面

嵐月

烏帽子をひきまよとむりたて

佳棠

わきをまよつ十寸極の芒履替

白眉

白ひすくきむさめのおと

一峯

とろくと大仏殿の人の言

眉山

一目くよ盡る 世の中

幽明

形程ひある東の採ひをつら

白黛

百里あきも啼くうりか

雷夫

非分の川海あり雲の流るる  
ぬき出のそねは勝るもりり  
渾うけく片倉よのく大つら  
まをちをかぬきむ縁のつぎく  
何神う宮もあそ病も若果を  
つてちのすも雷のむきき  
咲ぬるの花の香を擔ひつぎ  
今谷園れをゆはよみよき  
渺くと水まうて山高く  
る市をくわとの字外  
門とよ喜日詰を觸るり

定雅  
東湖  
月峯  
朱玄  
驢丹  
笠安  
蘭更  
古塘  
春翠  
其成  
蓬洲

本これくくは跡る星  
臘ハ又あともまはさめぬ  
とつくと男 采ふむ  
志のい縁の社よ芥のうちうり  
をそはとけたり 紫系陽花の如

土卵  
青阿  
不朽  
羅城  
少如

右一頌下略

我友龍門のわろし時を得るは雲とよ  
金鱗をかやうし 活中又溜る 斬暢と  
ひとく世をまらふはむは元龍の悔も  
わらうまらふはむはむは元龍の悔も  
いしめふ事歳をかきし 靈丹志家

おたふし喜ぶ雲のむらみきととも  
世をあらきゆらハ情むへきれをわけ  
しきなりうかきりあるをうひ終は  
書とくれ喜もなりえ百十目の忌よ  
わたりつ大雲精舎の簷端の風  
ふきかけりゆらゝ庭前の山方は  
たもひわをさく

うつりゆくりよ ことばらよ

蘇子のこと

蘭更

わり師着雨巷の河叟舟のけりめ  
此津よ道遠しそ石山の月れ長閑きを  
わかんし三井れ秋風よ旅寝のいさを  
覚し一筆を身をしるぬき玉藻  
魂をちやほし人呑慎よ周して師  
作むるを乞ふ叟ゆりて予よ一啖  
をわらふ幣幣とて得る事有よ  
似たりされとも毎月洋濠の郷音を  
免さばそのち幻物菴又社を結ひ  
席をすうけく御き芥斤を乞ふ  
叟よとちやよ事うく蕉翁の結燈を

かけ菫の寫吟塚の浮の一卷を綴そ  
志免はこれのく袖く風雅の書よあふ  
叟をく東武奥羽よ心うつふく門人  
階央よ属し玄くく之存よしそ天明  
水鬼乃三月毎ひ事りて義仲寺に  
法席をゆうけ之井何某乃悟正を  
信し法義懺法を終し且幻住庵よ  
俳詠を唱て

蕉翁納百回乃遠忌を引とて裡れしも  
命救のかきりを志すれくくあや正月  
廿日桃睡苑翅の書をあこくそいふ

此曉阿叟美容大兼法其蓋よ味し  
終ふまといけり識しやふも何し  
忙拵くそ洋舟よ楫しをくあき  
閑書亦舟を舟ふとみよ友う知を  
くくくひ龍門よ予あは以下ハ鐵の  
亡骸を扱く侍よ蹠跣寸扱も  
あふきくそすくぬハあひ然傷を  
うく免合くありもありの名をさく  
朝よむあき星家よ向ふえより甲子  
盟約の始より此列あへん事ハゆり  
すりとくそも法後破よ所し

夢の命毛も終をんをりりは御吐く  
さうまうの竹竹りり  
さうまうの竹竹りり  
さうまうの竹竹りり

正月廿六日於幻住菴終り

追悼之俳諧

騏道

夢の命毛も終をんをりりは御吐く

漁更

あつきのさうまうの竹竹りり

于當

さうまうの竹竹りり

規風

さうまうの竹竹りり

蘭芦

南とさうまうの竹竹りり

さうまうの竹竹りり

慈周

夢の命毛も終をんをりりは御吐く

五英

あつきのさうまうの竹竹りり

百萌

さうまうの竹竹りり

二薑

さうまうの竹竹りり

馬涯

さうまうの竹竹りり

艸芥

さうまうの竹竹りり

吳罪

さうまうの竹竹りり

蕪化

さうまうの竹竹りり

糸二

さうまうの竹竹りり

吾今

さうまうの竹竹りり

三蕪



ちれと香は今に希き梅の香

五英

悼

三深のひさびさきとちれ梅  
物老のちるよとのゆりき日より  
うくひすのちるきくちるあつ  
古くゆやそくとのちあみとりをり  
其風よそちのちなつりをりなり  
花のゆきをぬ障のちきき此文  
ゆめこの書のよ入きや場のち  
月入く毒世の為のちるるか  
つと跡せきやのちむ律の序

葛巾 艸芥 呉罪 馬涯 樂二 桐五 于當 百崩 素考

ちりくちるぬちのちをすくき

蘇律

月よ暮ひるちよ忘る梅もほ

漁更

あまらちむさる梅の梅や今ゆら

兼蕙

むらさきのちの根をききとれま

鯉一

名のちあひひー喘をきき

烏孝

を吊

規風

ちりくちるぬちのちをすくき

二薑

一代の風流ハ秋のちのちをすくき

二薑

一代の風流ハ秋のちのちをすくき

二薑

一代の風流ハ秋のちのちをすくき

二薑

暮雨巷のそ〜き名をの〜疎〜うむ  
閑よはへ胸はくられてさ比の交りひらく  
心ひもろを悲〜きや中よも〜をの  
昔の秋と起れ 幕下よ台起く事ありて  
少〜もよふきみぐ〜起よ色ひな〜あり  
た〜きりに神をつ〜極〜道 終  
おめてを起さ〜き 鏡の眉い下も程保は  
ひうふうとくあ家ハ右心〜と〜てハ  
湖と妙月又列を悟〜わろ〜さうの〜  
さみ再會を起ひ〜も〜必ハ誰〜甚よ  
う白ふら〜を月ハ誰う杖をう照〜

三三三三三

ら〜か〜ハ何う〜えれう〜の朝臣の  
慈を起しより〜らみ家人〜人  
のうき〜あ〜は家を名是〜る言の  
〜も〜う〜き〜は〜ハ梅のひうも  
庭〜き〜のうハ柳乃〜も〜の〜き  
お〜ハ神人の小松も〜た〜物 っハ  
み留とのま〜の〜つ〜きむもゆ〜  
や〜ハ難波のわ〜のう〜お〜病は  
さ〜お〜されてお〜ひ〜た〜の〜  
烟の末もお〜つ〜心迷ひ〜  
能もせ〜秘もせぬ旅の〜の〜と〜小

くこの歌をとりあつて、櫻腸をたつと  
いふはすこし知らぬわ

喜よなとやけ法をあらわむ

古鳥帽子

月居

一日の夜を交すむの十年は勝せり  
と、伊豆の時より身底よとくすまひ  
是より新川の主人を業そのけめ  
つりし、早々草倉の隣はト居り  
夢はかきこもるも、好まその字は  
すむハ朝夕ともあつてひあえは

喜よなとやけ法をあらわむ

師父のこしく親しく語り、喜よは  
多分の、癒りくよきりりて終り  
は多世をゆりのひぬされハ志のやま  
遥きより、三井、伊豆の秋城、はんと  
光よととく三井、伊豆の秋城、はんと  
風野のよきより、あめぬるるらんも  
らんをまて七日くのほとの家の  
世の言葉いと、喜よ、伊豆の秋城、はんと  
喜よ、伊豆の秋城、はんと、世に、喜よの  
ぬふよりり、伊豆の秋城、はんと、喜よの  
喜よ、伊豆の秋城、はんと、喜よの

あしり

法下

まろお家巻

芦雁記

三三三三三三

二月廿日

初月忌控古渡洞仙寺

法會終り

子規を苑山の山流の香とくも時と  
なくふり出さく啼くとよほそ人の心の  
響きとくまじあやまらぬさく  
はくこれ香のくまきそのひて常も  
まじ同をくまほれくまや物をも常  
豊うせたすひぬあよそくきやかき物よ  
あふくくまらぬく世をもくく人のこハ

三三三三三三

多ハ海山の松とつら中子 忠骨をさうしんを  
 常とくしゆもやしゆを此 申つて身を九事の  
 形のうちよもくちて 孫の極とくしゆのり  
 これすもしをさうりみろ子 蕉公の在り  
 粟津の浄土よけりしひく 文字去來の  
 徳を善と善とさふ 佛蓮は圍遠し  
 たまわしめあをれしけあくも 侍り  
 けりあつれたしをさうりける

俳諧之百韻

散うめいふか 墨海の白ひや  
 茗のゆりの 書をさうさき  
 峯の雲里ある方 維多びや  
 ちりきき 階子をまゝは出るも  
 次しき人の 袂東をたけぬ  
 つしきし 秋の中し 沈  
 雲霧のまを 玉明月は 淨けり  
 たくきを 門もうこく 書の名  
 層しりと 物書なる 松の衣

士朗

卧央

白圖

駢六

万徳

彪門

紀鳳

五周

昆明

こころをさる信く来乃そ  
 心をハナハ書の色との意家  
 おしもとまてし一八の花  
 水鶏なくねの括ひ鳴ひ  
 神泉苑のうここは西宮  
 物をもの依りこもり法師も  
 さひーきを念ふ念をまじり  
 ぬを壁よねをの月のさり  
 烟おくても時をーる小  
 筆筆を括ひくすよらに房杖  
 くふも一日みぬ印判

少海 沙漠 羅城 素兄 素外 李谷 徐英 閻毛 岱青 圃曉 沂凡

花のてこ山内ハ人評されす  
 ーら浪ちうく書風の吹  
 せしーとそをまよ入まよ入  
 強をー事をーてハ麻精ふ  
 其ひー女のわりま身をまて  
 かつまてくはまかまむらむ  
 棒一弓岡の名舟のまのま  
 今つまていたまてー南胡  
 織の及まここー物の何やむ  
 花とーとまりま葉の花の散  
 詠ままりも何とハ者そのや

岳路 怡泉 吳井 南陽 臣川 寸長 雨曉 凡鳥 閑里 扇里 桃年

けうくくと出く返るをいふ  
 雲より鳥返るをいふ川向に  
 亦權に疎る大樹を乃月  
 名をいふふ東玉武士の神の露  
 をいふりのふりのかたういふ  
 快き折を吹ゆく神の  
 湖うけくいふ稲の香  
 和くをいふくわくき物多  
 常口との痺をいふ  
 鏡戸の明をいふく夕日香  
 誰うをいふをいふく山をいふ

此哉  
 鳥雲  
 垂満  
 蒙水  
 也梁  
 看古  
 桂五  
 共合  
 星阜  
 大年  
 一風

霧も初く出れく世たるの御  
 更う初く友のいふハ志はく  
 片破の月裏物つき雲の中  
 今朝の雨をいふく  
 初く草やわくわく天ははは  
 井にけくいふく橋つらる也  
 面白きやをいふく秋の花  
 雨の音をいふく  
 春くれぬ何ていふく  
 毛けく思ひく草をいふく  
 をいふくといふく

茂竜  
 斗三  
 大阜  
 并二  
 發鬼  
 満子  
 帯梅  
 魯雄  
 庭甫  
 五寅  
 縮城

若狭小細の塩出しをすまひ  
しつゝ雲のわくる目程雲蒼く  
田舎鶴をきいた歌をうたへり  
送りしそよ阿闍梨をえまひ  
身をうらぬハ一のく方をき  
花ぐりのをかく落し風の留  
ふくらの鹿の草を擗出に  
此寺は扉とつふはなりりり  
脚氣つて何る乞食の僧  
いろくの泣程よせよ月と雪  
あな名師とちりり 鳴り

近江

雨滴

士朗

卧央

白図

彪門

万岱

善涉

昆明

少如

素兄

七五七五

松風のよみ平も迫られハ  
襟のよもれを濯くおろく  
只人とちりり火も焚御もとり  
嘆おそき粟乃木の下  
猿の子の中くよありをそそ  
すこけ舟を乗を呼よと集り  
筆の垂の水即ちくは流る  
恨つゝ乃月のうらみとそ  
けをなすも車破れ一妻  
塘をなすも水新のよ 低  
夏をなすも水新のよ 低

花城

孝谷

素外

間毛

徐英

圃曉

岱青

岳輅

南陽

雨曉

舟長

名のよき免りある物をとて事  
わりとて免りある物とて事  
やまとの燦の如くつねに  
ふらふらのふらふらとて  
あまのふらふらとて  
むさくゆとて  
冬羽ハ涼き風をりりり  
昼根 暮し青ハ嬌きま  
外のちうちうとて  
好きし紀事とて  
風は涼きとて

九鳥  
扇里  
也梁  
鳥雪  
斗之  
茂竜  
古常  
大阜  
魯雄  
護兜

まんふりと古き小社を引り  
何とてひくひくふも  
白榛乃乃の肉を  
之根の秋はか  
稲は下の稲は出  
今を所りりり  
金槌むは草へち  
柴焚々ふり  
歎冬乃枝ハ  
和れハ  
此あり

栢城  
帯梅  
逸少  
五寅  
雨滴  
庭甫  
士朗  
沂風  
大阜  
彪門  
長林

何またとむ風のりめろす  
花鳥乃考も昔ハ萬景を  
南字もふ柳海とらなり  
羅城 盛青

衣(身)乃沙を教ますふのかりを師の病  
床よかしはき居たりと病のひふ  
ある日その教乃とあくし来た幸点も  
卵やい示し強りて後きそんころハ  
吾た方好強いむまひ留より汝玉子  
強れとう室ひなる強まを強のち  
強たよりをさう強よま強うに

月の始のころハ羨うつ言(は)  
かこくそわよく懐いとそ  
いひあまねしつちも人も懐い  
阿ころ中よそ月の女二日呼の  
余下強を告事り強歩返一なる  
悲しよは強ましく胸せまりて  
忽強(強)の強と強(強)来よ強

沙音のあらやと

ふきる強が

臥史

檢香

夏廿日蝶多きも静也  
おもしろ極の事いねまの草が  
鳴鳥の音のむ法の花むら  
まの目もかくまうりま恨ふ  
草一世界いんち知り小山様  
涅槃舎まをこころまたたき  
蝶鳥もかき地まふは法が  
なまき法の名ハ程き一揚ひり  
確りけく今ハ洪き押とぬ  
暮歳夜侍のこに廿日月

万仞 羅城 岡毛 岱青 岳輅 少如 五周 烏雪 松人 沙漠

此みちのけりふきてそのあ

りくくききこあまぬまのま  
あそいこ世を隔りまのま  
なまたそはまのまぬまのま  
山ハ草ま多あまこあゆや  
ま柳まあひなき月のま目  
陽まあまあまもなきわら  
梅りまは泪濯勢わされま  
物まあまハアはあまま  
師の病中一うきまのまの  
まを唱まも物まいり

魯雄 徐弟 満子 逸少 茂竜 稻城 昆明 計之 吉甫

たえくまあえくまこそ花ち  
を脱く浮世のみちの奥ふじ  
角落く廉も字有り神の  
まハ雲のそそそ雲のあ  
除くそそそ花一す  
これや ぬ極るも生も手向  
ちうくなく 結も法一  
あちりくく 結も法一  
あちりくく 結も法一  
あちりくく 結も法一  
あちりくく 結も法一  
あちりくく 結も法一

榎台 大年 吳井 丸鳥 志分 雨曉 桃李 石里 閑里 沂風 寸長

法のそそそそそ  
極か糸のそそそ  
雪々々々々  
目々々々々  
八月のうけ  
そあうめ  
左侍の月  
霧とそそ  
雪のそそ

南陽 巨川 雨瀉 五寅 古常 閑虎 青峰 駿千 嵐桂 李谷 守昇

世ま春のそく大本振りと一目より  
うんたおてつとぬまとぬま  
秋磨 朶乙

嗚呼り好く師と師と幸此の  
むつひや雅と信と師の室ふと平も  
西曲とひ平のふと師も  
うをりりこ二人とのよくあまの  
師の身まより好ひて由耳よまきく  
と我失ひ口よのむむをを  
な思ひのほは思ふやまきりてわ  
垂満

かけろふの勝よあがり香部山 桂五  
松とととふふふふ又つれ雲 星阜  
つう桂花楊の字名を移し行ひて  
部と字名がうつと行きて  
とつ一程を移して家う今け  
くみと感ぬ  
も向てもや室家うつと室とて  
款はくするより厚も切なり  
嗚呼りといはく桂の陰をし  
歩ぬ人は庭の園も  
桂二

看古  
庭甫  
物裁  
桂二

阿叟をよほく嵐山を賞し

あゝ

をよほしひは花を遊むむわし山  
さるるり人懐かふはぬらむま  
あまはくそふはゆりそりむそふ

初七日

枇杷園無り

梅柳又てもくやきゆあつひ  
くあままふふまの

梅柄と唐り方よ押ひけて  
南園のみくを又ぬりたり

あふしと林の風吹朝の月

草堂のむく名 蛭刺鳴りん

右一頓下略 以下同之

同日 朶凌舎無り

そくれとひひ悟とひひくまの雪  
ゆあへあしたのをくくうらひと  
あま梅のちらと向ふ神のうま  
あふりともあふまふり  
柿つむむ秋とをりりり暮下

二十七日 桂葉下無り

月もあをくくくくくくくく

蝸角

尔遷

桂裏

士朗

白園

盛青

閩毛

羅城

卧央

紀鳳

彪門

沙漠

昆明

少如

白園

風の吹くは春の上は編  
頬白の雪の下は編  
琵琶の舟は橋の  
空を舟は水の中  
空の舟は野を舞  
同日 薩園也

御青 士朗 素外 閻毛 卧央 鞋五

敷六 満子 岳路 少如

家への心は離れ  
火の心は出

度甫 羅城

二七日 銀後古也

素外

この心は古也  
蠶の心は紙也  
隣人の心は雨也  
二、中、蜜柑也  
杖の心は白也

少如 卧央 素兄 雨滴 巨川 白園

四七日 寂靜庵無事

羅城

何登もぬあふまの月影は

白濁

樹もろくあはちりくちきとを

宮毛

きのふあふ燕古巢は魚出で

岳格

汐止も海へ名の

盛青

旅人をむらへる家まひり

万盛

夕やけはまろく淋しくせ

同日 素兄亭無事

舟の波をより又版指をうりて

日々くはくはかかたけきこひぬ

飯卓魚はなすこころも極の興

素兄

ゆきハ浪言まもすきとそ

五周

角落一麻の額を控やりて

駢六

をの黄くく云有くひや

素外

三日月の夕をくき古ま

卧央

同日 春日居無事

剋明

ちりくちやまの春の雲

沙漠

柳の影れをを白

紀風

際名のうけ返わりく

吉甫

船ハ山のうちよく

士朗

雲物もすくく

昆明

面のあやたの

五七日 一勾井無り

あこりありと見えは蓋なり其の月  
と名をんくぐちやあわしのふ  
美能は滝のしら玉粒をひそ  
車に通るまらばらりす家  
草袴腰ハふこは押まうり  
代衣入りぬりこめのこ

桂五

臥央

白園

岱青

桂裏

言毛

同日 鳴巢 無り

あちりく風よ心のあけなうち  
さひーさゆる其の夕ぐれ  
三日月の月子睡をおくゆて

徐英

士朗

亞滿

人よらきと年ゆるちり

羅城

あきも心在中と視ふ任の表

万岱

幾間越へるあるわうきれ筆

少如

六七日 岱青亭無り

俳諧乃乃泣のむろや雪月花

岱青

化佛囲遶のうくを能はの奇

野城

雲のぬ水よこををさうはん

桂五

氣をねますふ人をみよ出る

岳務

すらくとさかりのちも悪小社

少如

牛の歩の夕ぐれ

士朗

同日 十字庵 其り

圃曉

名月のさしやうも世はなき雲  
素のく霧みふきのまわり  
戸出をぬく雲を回すのあとを  
ゆく水衣の神のちひさき  
三日月の端より起る秋の雲  
袖くほをり 歌舟のすらく  
数河をこたけはまゆとき 鴨の音  
あうーろくく 出る家すくむる  
晚鐘のりぬまゆもなきこと也  
風をきき風のさむ歌いかうゆ

巨川 沂凡 五周 閑里 寸長 雨曉 凡鳥 素外 卧央

あつらひは海まきくまふ嵐の雲  
之羽たせらあくる名月の夕まき

扇里 梳平

七々日 五周亭 其り

師とともはまら狭の小傍よ

旅泊をくくともむもい出く

五周

小海子 魏りよふらん雲の雲  
名をなき雲の月も花の雨  
枝るき雲手の葉を摘んで  
日々わらくくも戸をささぬ也  
名月のまはらを懐く雲のま  
萩月け衣衣くくかゆねる

白図 卧央 士明 物裁 素外

~~~~~白の如く吹く風は秋の風

庭南

百箇日 暮雨蒼苔共り

白濁

後をききたるり今朝の詠ら

岱青

百日をもちて一弁の花の 陰

臥央

下枝をもちて枝を離れぬ

大阜

人さゆくのうつを貝 賣

間毛

春乃月ねぬえうう懸掛

岳輅

はふ蘇の二葉の葉あわさる

士朗

はふしくと雀の宿のゆきぬ

徐英

衣のやぶさけはる 怪一さ

昆明

障の音のうけはる言く雨の音

十二詠なうはこえは

沙漠

馬は附り酒樽を引寄

李谷

急折たゆる人のまなり

素外

晴く家女日阿下りの杖の月

五周

雲のうらをめくる水音

大年

焚つけもはむつりき葉練

紀風

後の子は流俗をいそぐる

万葉

まきまきの花お井は咲か

桂五

まきまきを雲ま丁の地也

物裁

四十と世の昔ハ反喬舎子舎一みとをり  
 きのふハ夜信亭子何そふ近くハ曉の  
 名の秀々々多雨ハ名跡をゆくむぬハ  
 六十一字予ハ古稀又とわらふおまじりや  
 ハと世の數短々々今や花の散下トハ  
 いふおまじりけむ旧知己をいふ思ふハ  
 老の吾儕おまじりあきなき歌歌一より  
 こゝろきこふ又起りて字をよむ歌集  
 ありけり  
 名をいへハ睦月もわらふ歌集  
 逸筆坊

名をいへ何と西京の鬼と  
 名をいへや我徒を失ふ  
 こゝろ天を各ありより野鳴を  
 名をいへ東流こゝろわらふ歌集

吹送れ

友雀ハ分巢ハ存ねハ心ひか  
 雲の舞ハ形ハせぬハわらふ歌集  
 名をいへ花ハ名ハいふハわらふ歌集  
 名をいへ花ハ名ハいふハわらふ歌集  
 雲の上ハ名をいふハわらふ歌集  
 名をいへ花ハ名ハいふハわらふ歌集

知多社十

墨山  
 水雲  
 大魚  
 士峯  
 冬和  
 玉席



花ちりそ鳥啼きと成まかり  
 梅散る梢は雪も白ひこれ  
 花の吹風情を去くよ胡蝶  
 下高く深き雪の名紗外  
 ちり際ハ河の蒼とをき、梅外  
 花のこころは木笠をり、六ひり  
 植ゑて一松のうけの、唐り、か  
 左りぬきて、世のそよよ春の雪  
 情やれそちろや一樹の梅の、冬  
 月西に入ると東南の、眼を、勝  
 梅さぬと、香もなき、春と、女、り

如泉 魯朝 井水 壺仙 里友 仙風 竜澗 吾春 千久有 且有

新まけの春の心あるき、口、か

木人

如那ききと、一頁の月夜外  
 雪の雪情、やとやたそ、月  
 梅散る、梅は、春の、梅、ぬ  
 月、花、雪、は、清、る、ね、ひ、し、  
 星、花、く、月、を、き、春、の、春、と、梅、ぬ  
 月、入、く、梅、く、白、ふ、く、向、う、か  
 頃、雪、の、む、く、清、り、く、梅、は、り  
 淡、雪、の、梅、時、を、向、と、な、り、ま、り  
 う、ら、ひ、も、そ、り、は、は、佛、い、く

佐屋社中 仙見 之祝 梅具 梅共 巴江 安之 米汁 風止 善百鬼

香菊よけりし梅もも白く  
春の月散り花のあけりし  
人さへもあつた面のむらり

竹新田  
等先  
青霞  
啓甫

宗道物故の御齒社中ハ觸穢の悔もて哀嘆の  
句をも梅を本意なくさし傳るゝ二草競ひをて  
此卯月百ヶ日は成されハ今ももて已く退慕乃  
名ひをのへ灵魂よりたけりぬ

社中  
木吾  
梅虎  
仙布

たより強く百日たをぬる梅子  
ほくまは國々よとて百ヶ日  
鄭公なまははるるも西のく

たくれ世を蚊の痕よあのみ  
古人志すは風塵の百合は苔の面  
花をり世をあふりゆくの変

笹室  
兔石  
亀六

いふ一年の冬曉甚き急師よをたてしや  
手病よ臥々終ら良業終わりとて起  
旧のこころ成ぬる懐ひを中さ海りく  
春立知れよ言て暮をのへ素里はあふ  
や〜〜〜はうけくむ〜〜を辞  
ゆり〜〜〜短冊の巻もかま〜ぬ  
旅はあや〜〜三屏〜〜人々の洛陽の





吟食もくくさむ那智の傍原  
字即く接連ハ槐をいさなり  
白ふ秋のささるる  
毒もくくささの藤子新をさ  
予の情もくくくくくの神をさ  
世一圃の方とくくくくくくくく  
予の情もくくくくくくくくく  
夕子まきくくくくくくくくく  
西ハ小降と粧うくくくく  
是くくくくくくくくくくく  
月の在園は甚ちくくくく

唐臣

六甲  
風射  
巾大  
雷后  
局明  
杜嵐  
北固  
猿眉  
管外  
曾外  
伴序

實方のねくりくくくくく  
持止む鐘の垂りくくく  
一里の八日ハくくくく  
空くくくくくくくくく  
教くくくくくくくくく  
右百頁 一頌下略

執肆  
月社

南平  
國毛  
完小  
雀鴨  
万寸  
渭原  
凡射  
北風  
分字



くふ邪也乃人といはるゝかきられたまふ  
まかぞとまふおきるをうのひゆり

身よとやき書や

士朗

詠のまの露

一也勢乃を就事一日よりも  
程速也今既先師むうそりの  
大徳養俗の徳歌をいへて  
ゆりや他をいへるは他わらぬや  
風羅一字の談論是を信じて報恩を

門前の清く色

白園

あまみそ法のま

社友のすく先承するをさし暮雨蒼乃  
す秋を守りてれうなふいや阿叟  
一周乃忌を孝家止れ朽葉を拂ひ  
採る鼻搦香しき人こにゆき

あま月あり

卧夾

草と二葉よせ

跋

泃淚慟哭農句古禮を安泃  
免と落梅をといふ蓋落梅を  
其時を亦宗一也也 吾鄙  
言信能尔ほひ何ら美 吾  
あつれりや

羅珠記

寛政五年夏五月

門人 卜央 揖

佛語の正風を口々尾張の玉は吹起りて  
冬の日は不秋仙茶ぬそけかき芭蕉翁  
佛に〜たる他人わきさへ表尔おほえぬ  
とて身を本り〜〜尔風程〜て都一鄙  
をり〜の吹り〜尔冬〜あ〜に〜又〜  
たまへり其〜ろ弊田小指てゆひ〜  
袂路の丈に破れたるをきき志のふん能  
す〜尔生ひ〜ある中〜尔世交〜りも  
心〜すり〜るや〜さ〜せらるかそ〜  
磨雪は積小造管を〜ら〜ひ〜る鶴鳴と

人の心や依屋の御本飯糰世らむと成  
海色の贈物たる白く子鳥の鳴り星砂の  
やまふ心をよきとて 笠をきく ころころ  
もきをきり ころころ 月もはやくとせり  
代々小田新水とてり又親き人のなりとて  
粟稗のたぐふ子鳥菴を尋ね入刈田の  
鴨子雀巣をたぐふ子鳥 帰るやとて  
夕暮あはれり空あるたとふも似て古  
月をあらむとて 夢すくらむも 時ある  
春をうきむ 或日書 林風月堂子  
鳥もやとて 見えとて 志門 立よりて

休らふ不世とて 鳥もあふり出 一巻ハ

いさ出ん鳥見ふころふ新水とて

丁卯攝月とて 月夕星何来とて送る也

鳥一玉をさうとて かなまき

三嘆ハ風月堂孫物と秘夢なり

いさくらハも再業なり

其白鳥古きをよとていよとてハ 子鳥の久後も  
又めとてたて 不肖士朗百子のまを 三巻を  
とふらひとてんとての白とて 胸つけるハ  
あつた 言ふ豊よりとて 云々 三巻なり  
あつたりとて 三巻 半巻とてのいぬとて

何の幸ひを云 吾々の事云を云さしや  
中 師も今ハ音く有り 玉ひぬらふわを  
風月雲中 小席を寝たり人くを舎ハ  
少も尔為の美 淡み終極 一とありふさ  
まきの後を改く

麻刈集

雪之卷

いしらハ雪足小ころふ 不すて  
百逢しむきまの ますら  
塩むら小纏いらら 皆裂らん  
又さし出たそ新の 燃えさ  
山吹のあをを 入りりみ  
蒼子良そくえら 色くあり  
桶の底かくりと ぬたて其のあ  
何うもきこゑり 日す 降りり  
徒負し 伊賀の石切 来遊し

士朗

暁臺

朗

臺

朗

臺

朗

臺

是者ハトて死田を破る  
 孰恙能乎井もろくふ下居  
 々ふも焼坊能多言  
 ひあくと休あも月代  
 貝壳櫃ふけりる阿き風  
 去後志もや業ふきち  
 本質の温泉に福り列  
 刀賣る人尔出向ふ花のけ  
 破也泥障を師矣又發  
 妻のそ一財貯るの種あり  
 ぞしたそまき戸ひく指百と

朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

沙船人曉くくさふまわらん  
 梅まきくくく門阿海々酒  
 烟そふて折流くく知ふり  
 垣より出る水のちりり  
 光は流梅を玉りとまふとりそ  
 承之下向のちりき朝明  
 父を松母を梅と有りめそ中  
 浮世の多量多風の送り火  
 言る夜の月を流すり上る也  
 福す勢玉へ居能言る石  
 統て子民家もなきおある

朗 臺 萬岱 羅城 岳輅 閻毛 岱青 蘭水 卧央 彪門 紀鳳

同の盲るすて歌く日本祀  
終能喜能天の戸海山うら  
まをふすぬ人せてハヤ  
本のりふけも鶴もさくくハ  
蛇の鳴日多今も長深心

朗城青  
島拜吟  
白園

雪のりーえき降りく日

枇杷園ふる砂ー一雪

雪もてる雲の鹿元ちうう雪  
梅一葉初雪すてハまたハヤリ

暁臺  
多帶梅

那の院古を花めくりむつるユ  
人々のあはれハいまここつる一ツ

月もた〜す石くけやりあ〜

枯〜葉もひらり葉〜こり

初雪の那ふらまを板戸哉 士朗

菘室

枝炭小見中ハいらの落雪お  
落雪やき〜白菊能あ〜り〜  
白雪をわら〜のふをハ東山  
冬鳴〜葉〜り松の雪落雪  
け〜〜せをふもな〜雪の山

菘室  
梅吳  
聊于  
杜常  
琴波

赤良坂千麻の尾小見るくさの香  
衣を着は濃紫よけはれを  
ぬくくささ香小麻色寸葉をけ

青峯

岱青

間毛

書懐

月小老のつもりのいよ〜く〜の香  
降りる香花をのふは〜ぬ〜きさ  
人のけり方〜り〜る 風の香

白圖  
文陵

騏六

兩尾山よさる

老松の香〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
け〜〜と香のふる〜 誦老から  
深くやしきの葉ふをれぬき

多木人

徳六  
自徳

三木  
木吾

呼後松嶋の里をさる

香あゆみ〜登の香〜ら〜ら〜ら  
萩の香〜満なまき〜まよ〜ま〜り〜り  
香のや〜よ〜ま〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
香の日やんほ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

野央

紀鳳

沙漠

羅城

風之巻

ふう〜〜〜風を〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら  
風よ志〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 月  
砧うつ遠山〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

白圖

士朗

魚依漕舟をうけてをり  
夷およ古き風情やのららん  
橋をとつぬ人としてハナ

徐英  
朗圖

登八事山

木くくくく佛の魚の志つくや  
あくくくく隣の前き日暮外  
風や身を木く山のさくくき  
くくくく山又山のくくくく  
木の鳴て木くくくく吾家外  
木くくくくくくくくくく

岳輅  
臥央  
吟幸  
古常  
啟甫  
驛道

風小海鬢吹り破戸外

五周

くくくくの吹つめて又の吹いた外

岱青

虎足菴のそのかき八岸高く橋を

土橋をワくくくくくくくくく

木くくくくくくくくくく

白圖

平系少て

木くくくくくくくく死て幾世あ

趙危

木くくくくく海一をくくく

士朗

くくくくくくくくくく

入素

風や夕山名の吹りくく

卓池

くくくくくくくくくく

曉臺

木曾山中

序々や日も暮る〜 孤りあり  
木々〜 後祭あり 神のついでに  
こゝろをや風のうへの月を〜

桂 五  
羅 城  
丹 戎

ふきのすゝめ

星沙きのの影と風とを〜  
俯るの中は落る之 日月  
小腕を挽す 芝附のうづへ  
人のと〜 ころ ねは 應 有  
〜 ね 伊 賀 ち め ち め ち め ち め ち め

岳 輜  
士 朗  
吳 井  
輜

宝珠ぬねをかさる 珠 出 せ

井

串は縁をけらる〜 海をよぶに  
ゆきむらひて

高浪やふきぬて〜 ね ね  
伊勢の海〜 ね ね ね ね ね

万 岱  
卧 央

送茶

啼き〜 硯の海の水を木に  
加茂川や水〜 ね ね ね ね

間 毛  
采 芦 涯

醉起步溪月

目の覚て見せハ寺も川 千鳥  
か〜 ね ね ね ね ね ね

素外 玄  
巨 川

いとよきちかきあまのふたつが

湖色

古きや福ふり島もな〜千も  
夕子音海をま〜ち〜め〜  
萩り〜りの沖小楫くふふ音外  
磯ちとり沖のふ音〜へかりり  
浪のふもむ〜り〜音ふ〜りり  
むき行へあ〜ふ又〜る〜りり  
云何小て

夕海前千に神孫を〜り〜るふ音  
夕嶺に上小臨む〜り〜るふ音

桃膳

羅城

雨滴

素兄

木人

安之

風止

士朗

元旦りて

夕雲松風のほ〜り〜りうな  
む〜り〜り風のむ〜り〜り  
鳴や〜ん〜りのを〜り〜り  
む〜り〜りうな歌を〜り〜り

曉臺

李臺

岳輜

岱音

鴨の巻

海音て鴨のま〜り〜り  
煙りて海のま〜り〜りの  
袴皮む〜り〜りのま〜り〜り

沙漠

曉臺

すゝもる人小ぬくほりけり  
初秋の屑をまろしむ半簾  
老馬や〜白萩のうけ  
七葉の鉾のさひするまろし

漢全臺全

訪隠者

芦鴨のそく水かゝる鳥の子  
水色や汝住江鴨もろくも  
夕月ふむくひて鴨の流けり  
水色を尻尾吹木こも日枝り  
水〜りのあふろくも嵐うか  
鴨鳴く〜ほの〜

多墨山  
岱青  
嵐桂  
庭甫  
帶梅  
蛇至

うまうもや藝男小射尚さま  
ぬあ〜て泥かぬの浮寂を  
水〜りや小笠かくまの朝日  
ま〜りやた〜く〜く人の乳  
あ〜るあ〜るあ〜るあ〜るあ〜る  
あ〜るの子あ〜るあ〜るあ〜る  
辰るす〜ま〜あ〜るあ〜るあ〜る  
夕川やのあ〜小鴨あ〜るあ〜る

暁臺  
青霞  
沙漠  
士朗  
岳輅  
昆明  
紀鳳  
白圖

冬枯の巻

信まゆ〜枯〜解〜あ〜舎〜か

萩の枝本の光る日ゆく朝  
雪もくくふき山人の亭子頃より

蘭水  
曉臺

出柴門

冬かきや日の暮りくくとるの湯  
ふ田うきききり川邊に木沼うか  
吹くふへ吹ききて枯るまききけ  
新波入江小古きを尋ねわて  
ひきき草小浅る新をく三日の月  
冬枯や何を足送る麻の耳

閻毛  
看古  
白圖  
采虎  
岱青

持扇一巻巻てもたき冬木立  
冬かきや浅かきくくの夕々々り  
暮天小河色の草のうききふうか  
霜枯くきき居るやう新雪

京  
關更  
草  
仙児  
曉臺  
全

枯草原頭有感

いろくのあつろそくふ田はこ  
くふの目もそ木の常や枯尾と初  
一ツ家の朝小移たるは落葉ふけ  
畑中小柿一色新落葉ふうか

少如  
現山  
三止  
芝表  
士朗

冬枯の光

金屏子松の古さよ老こもり  
 雀来て啼くさのあか  
 呼ぶや細引の繩もふつん  
 腐ま〜机流ふも崩〜あか  
 蔭衣ふいふづまわくも月ハ雲  
 善もあつ〜も拂ふ長 刀  
 杖悲〜足まに柱よ一そあり  
 梅思ふきたるあわ方のら ぬ  
 花子ま〜能也新浦波をうす  
 妙法花經を理む〜しきふ  
 他の子の老ふ梅〜をさきて

雀 青  
 梅 青  
 杖 青  
 蔭 青  
 善 青  
 呼 青  
 雀 青  
 金 青

尾張あびり〜りあ〜く 淡 鏡  
 月此為小飯乃四阿〜きとら  
 わり〜すてたるあかの〜り 舟  
 笠籠り雀小初ま〜り小候 名  
 其〜眠たいも病なり〜ん  
 花落る〜ま可能かなむ〜り  
 ちるう小鳥のあ〜りすむ〜り

尾 青  
 月 青  
 舟 青  
 笠 青  
 其 青  
 花 青  
 ち 青

幼佳菴小を結〜

火桶抱え〜か〜杯あらし〜小泉庵

野 央

世を蟬よすささこゆらんをよ  
冬を誘う〜わい日夜の睡ゆ〜  
む〜ろ戸せりあ〜りのをよ  
萩ふん〜ゆもゆりをよ  
二三日ハ二橋下志〜ゆをよ  
冬あゆりす〜ゆあゆりふれやま  
山の奥あゆ田一枚ふゆこ〜  
は眞ぶ人をもす〜てやをこ〜  
或人の油〜ゆ〜ゆをよ

關歩

白圖  
北橋  
免石  
羅城  
山嵐月  
昆明  
士朗  
龜六  
岳輅  
曉臺

ワカ友桐毛被伴て後落香川のあ  
よゆ〜ゆ〜ゆて葉を煮〜ゆをよ

たの〜こがら  
五月桂〜竹の奥をりふゆを

岱青

旅、藤のまき

たひゆ〜石をゆゆの夕月夜  
市のゆありのう〜く埋〜す人  
歩り〜人あゆつげりあ〜ゆ  
あもよま葉の日記風情あり

昆明  
曉臺  
明

八月十四夜湖上を歩む

水をたぐりてふと志きりるり波の往  
来のたひひきの極もあきらめ月  
ワケ掃ハらふをうきりりおと子観  
一日おたひや世はゆり世の世  
春風におふたき砂のあゆみ

白圖

菅刈眉

岱青

仙布

卧央

刀福川、夜泊

亮も浴て杉戸の障を秋の夕  
さよの舟山正月あえもなかりか  
あうりの笠をつくる掃ハらふ

魁門

一音

賈友

九月十三夜もとを歩むるぬと音の

清無うさげのすうらふゆき舎中のまこ  
共ふもくくくくく神代川のまはら  
のそめハひくうひそふ古園の感わり

曉臺

少如

菓居

桂五

岳輅

大岡寺槐女に

吾まりのゆきふハわぬまらけ

沙漢

るらり

その日能くうつくしや石船山

士朗

虫能くもやちんハるまじ山の上

巴江

柳ふき方のちんるやまのむら

物哉

片渡ハはしき月のうらも外

伊藤

若松山をたたくきりも若山よ

のちるとは房州を名りりも

閑寂又たくひをり後半初尚能

曙基といハ

大車

後半を能くも蚊をる山の上

昆明

蚊居ゆぬちやも林ハまふり

聴吳

爪買てぶ良のせ菜ええや

何れも菊さる中ふ吹ふり

同 非如

うつくしや母ゆをわらば濡蒲園

桃生

子東う東武ふ新を多ゆとりを

送り事りて

唇のちり同一差んて節をり

士朗

あらりまや宇都の之の廿日月

紀鳳

奉答答如事

年をさらぬままでま難をささる

川尻をくまむらりら

紀鳳

梅柳をらくと枇杷の花ちりて  
夕の連歌をまよひてたたく  
盃にうけてあはれむ之日の月

暁臺  
士朗  
鳳

幸小將をふ志軍

人ハ以テ魚ウ一水カ

昭言の人あも幸の名跡うら  
史を燒く幸を懐むり沖の舟  
幸の日記をうく船又於舟  
ゆり々あう幸も川や岸お戸  
をいめどもあふ流く幸ハそふ亮

羅城  
間毛  
騏六  
泉日  
青阿

落る苗の初て幸跡をうきバ

暁臺

似合しや幸智人の革羽 織

沙漠

深拂しる梁さるく見ゆら式

徐英

くま作の菴つあまら深拂

圃曉

市とあまて幸を戦をうら

幸さぬねをふ角力のあをひよ

士朗

幸の市人うけりを牛の尻

卧央

幸の奥又りゆくもとの奥

五寅

新幸おりもことくりよ深拂

畦聞

燕の巣をうらやまのあすけ排

賈友

人間の彩色元て幸のさる

鹿門

嶮崎小糸人ハ婦有り年ノ暮  
年もワ中日あり月何り天候ナ  
秋幸や人も落つく整美の事  
年ノ暮梅の月間を恒長也  
おもしろく又たり梅を陸夜毛

里采

岱青

紀鳳

岳輅

昆明

喜多子歌

笠寺やむぬ窟も喜多の  
あちりしと梅のむ 四  
附きぬを祈ふるくつ見  
人々やぐと暮をゆるさる

驛六

士朗

満子

月夜家おもき藩園小日若きハ  
春夜をりくおふくむ一陽

山居

梅はくらく間を喜多の  
喜多や山のうすく月よき  
春夜をのうくよとそねハ喜多の  
喜多のちろくと砂は更り也

岱青

岳輅

物哉

羅城

逢坂を越る日

春の面半の顔を流るる  
春の面半の夜お似たり  
よくすも喜多の障草屋外

桃睡

庭甫

越毛

六朗

二日降て喜中ぬのらう郡  
幼子の花中 喜ひや喜うのる  
梅の木のをくくふぬく喜のぬ

龍之席山

喜ぬや蕾采花枯花あふ日ハく  
ちのさめや夕日ふうつるやう炭  
けるのら免もく 足巻ハ袋押合  
喜ぬや朽葉あしむ花露田川  
喜ぬのぬ木のあふふおやある  
けりぬや枯木のふを降う  
喜ぬぬの星もく合歌の喜り外

騏六  
士朗  
大年

玄く  
閻毛  
昆明  
圃曉  
蘭水  
曉臺  
雨曉

水碓の忠

多鶏啼と人のくは帯巻屋泊  
雨降跡るうの花の 門  
滌の束花巻やとてきぬら  
櫻ゆり且花眺のひくいす  
暁の月をうくふふは日と身  
白濁すく折し若花川ゆ  
女郎 花飯あ袖をぬきくけて  
おとハ情風破をきつてな  
うき風のふも返に帯の巻

間毛  
曉臺  
全  
毛  
全  
臺  
全  
毛

母みくくまて魚とりみゆく  
七五三切ハ板の本の神罪すん  
明堂々名跡屋敷七五  
月のあつたお花鳥のあわり  
灯ききゆりあをりあけう燈  
羊俵あつらへりあ守貝あて  
小浅まめたる僧をなり  
花堂十日もあの花こころ  
夕夕さる子藤魚物こころ  
砂あふあもふりくまら  
入ふハはく車きりりり

毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺 毛 臺

餅こり神の鼓の音を  
櫓の火色く目あろ啼よる  
雪屋の半をききけるむさわりふ  
せんす(なま)の岸俗あらん  
あ吹破研の藪の窟くもり  
縄つけておく櫓のうき板

毛 全 臺 毛 全 臺

宿坐

門ゆり水も汲す水鶏か  
作向く鳴く鳥も月のま

楚分 關更

水鶏啼り第八層雲よりの川

岱青

醒井みきり

水鶏啼りくちくちくち海き流ぬか

帯梅

水鶏啼り夕ふちるうき

騏六

白妙ノやまふきとくち啼り水鶏

五周

豆のなみ鶏尻あなをぬきあけ

兩滴

水鶏啼り中川水く

青阿

水鶏啼りくちとさへり妻との

曉臺

二人と八人まごを啼り水鶏

紀鳳

水鶏啼りやけら引う二ツと

白圖

佐屋の泊み

舟中福てまはみ鶏の舟たぐく

ツミ

幹亭

水鶏のめくも又降ぬや水鶏なく

間毛

大風のうきくちくち水鶏

桃睡

むくぬみさるるとんまは水鶏なく

物哉

晴の巻

刈あそび

早稲あそびの晴の巻

十日お月の光る梓けり

計之

落る苗をつむ袂ふあはるをて

士朗

ありの賛

鴨まてきりきりまきのたもと外  
ひくと鴨のまりし毎日う南  
財ぬか田縁の鴨のつそりき  
捨ゆ杉鴨のつそりきひり  
竹垣の竹まきりり鴨のま  
鴨まややくてあけき足のと  
あちまきり鴨のま誂遠り

關更  
青阿  
万岱  
梅虎  
昆明  
羅城  
桂五

三日月寺にて

鴨まてまの二日月は月たり

多宜

回

月流るくく鴨の夕う南  
鴨啼て旁のをひあふもと外  
月生る鴨鳴る水のすりくひ  
夕暮やまのけ斤も鴨のま  
鴨啼て舟の夕飯るふり

草之楓  
雨曉  
南溪  
米汁  
驛六

草菴の巻

粟稗ふそりくもあはるまの菴  
木のまきあむりぬ

丘

卧央

うらあたるまのたのみの身出さる  
漁の海士お屋をもちす  
すんさきへ都ちうーと細ひ巻  
最の花ちるあつりのあたるの

士朗

素凡

兄 央

間居

稻居まひひとり万載事り遠

薑 丈 芝

檀溪

赤おちと河り河原をわけて葉の烟

士朗

け白の深るらおもむきよふくきて  
ワせし又檀溪山中は尋ね入ぬ

附ハ二月の三日より溪のあちこちを

そくありき巻のええはせハ

あふえとく柳河り能く経所

岳 輅

隈くののりまき林の中へいふか

蘭 水

山吹のこころもて歩き極く菊

間 毛

月代や紙帳よびる萩すき

白 圖

秋の夜の深ううへよる垣うか

備 素 壁

屋根をまきまはさうそまふる

同 芸 門

幼時をとりてとも子時を指とす

春の赤やせ花落る花もやし

笛 青

くは方ハ附あう杖杖をさうある

魯 衛

長閑きや朝報言齋庭をり  
吟婦時ほくひんえたる維多  
あゝ林ハももあき林は光  
吾朝の松をえてあつ師定  
門口に松笠ひろふやう  
きりくは鳴や萍のぬきさけ

題画

養中の橋意しと吟するを  
沸しゆ小蟬もあゝ刈菴外  
口の右の梅ハつさくうをの  
春さし海苔橋やの落月夜

帯梅

京百池

満子きま

騏六

大阜たま

圃来

入妻

羅城

曉臺

桃生

七  
九  
三

夕鳥や這海々々の菴中菴  
萩咲く蛙揮出は小庭外  
藤鳴りて春をりゆり山家集

岱室

巨川

也梁た

月の巻

月也あるたふも似守 二日月  
アの中をこのころかあつりり  
ひよろくくと小まのそとの米也  
元てあーまき山 中 一 三  
様 二 三 四 五 六 七 八 九  
ふふふふと年のゆらふふ

羅城

曉臺

城

臺

城

林卧

菽菽やとこしちもきりー二日月

二日月後の波みきりりりり

三日月の暮のまき合ふ光計

三日月ハ玉のかりりりりり

根なり子引ちハ夕月候キり

月影てやとこ音るりりり

露のまきり月のうきりりりり

林何某の菽菽居の木のやせ

...

士朗

羅城

騏六

蛭芝

卓池

岱青

桃膳

...

杉影のちや月あそそ音るりり

暮ぬ豊ふりりりりりりり

さうひみりりり

二むりりりりりりりりり

月影中りりりりりりりりり

月影をさみりりりりりりり

核ふりりりりりりりりり

月見まハ悲りりりりりりり

平々に夜ハりりりりりりり

代くふ身りりりりりりりり

士朗

岳輅

吳井

岡毛

満子

岱室

五周

白圖

行くて帆送く〜ん〜の月

素元 青霞

月をさへる〜子明〜の月

逸漁

さやけゆふの月の照りを〜の月

桂五

秋夜に月〜も〜く嵐の

卧央

風を抜く〜て月をひく〜を

蘭水

出の月や海〜えを〜面〜

万岱 南陽

琵琶橋

月出て橋をさ〜り〜り

秋園怨

月のおふ〜るまき枝の子規

撫松

後月長まき〜の余計

大阜

ひ〜り〜の月みおす〜

芦涯

あ〜ふ〜年比むつ〜き〜の元

丈芝

あ〜ひ〜せ〜と〜りき〜を〜

そ〜ゆをむ〜の〜り〜

あ〜の〜み〜中〜〜〜の〜

月の〜を〜う〜ん〜つ〜平〜其の

名跡〜ん〜と〜達〜た〜ひ〜ぬ〜

一入〜ひ〜入〜〜の〜も〜

〜

〜



秋の中山あき

みーろ秋を横をりふせもあき  
なとさハ啼き山をくきす  
我若のききをほしき名ふけ  
墨煉るりとあきを拾ちん  
と出さ月と思ハ杖をさ  
一本並ひあきをさるるや  
門建て井の蔭ゆく水の柱  
夏の日登る京へつてあき  
杳作る宵の念ゆふ目を閉て  
回しあきと年をさむく

素槃

士朗

槃

朗

槃

朗

槃

朗

、朗

世に四十八

偏て何ふぞハ驚き鳩の姿  
 萩もすきも月ハ小らき  
 樽子の以つ秋ふり根の枯て  
 痺張つく板を挽こる  
 ひくくと簾揚をもる朝日影  
 眉巻めくり小出ほほ初花  
 穴一張砂かきちらは喜の草  
 逐きてを中て扇るし鳥  
 そつとくくく物を山家すし鳥  
 萩明くよよと習ふ鳥  
 小言をさるるを小袖みたる也

朗 葉、朗 葉 朗 葉 朗 葉 朗 葉 朗 葉

這ふ響のあな面なき人々や  
 手よも取まぬ鳥を覚て  
 抱の魚よらの風吹くより  
 夢よ又砂る三日月の  
 編ふ衣を捲く柳ハ蒼を分り  
 枯の流砂下総よ入る  
 大風の扇くくく又響く響の響  
 萩の鏡のちくくくくく  
 袖す小寂しき沙汰のつらさを  
 摘やはますや若菜のくく

葉 朗、葉、朗、葉、朗 葉

こまする可又花の雪も出さず  
同じ旅病を伊勢の菓子賣  
身の平ふ違をてんくるたき  
風の儿情まほ せくれ

朗 磔 朗 磔

岐阜あき

鴨の舟消て長良ふ煙のむら  
むしろ引はる短衣あき月  
白雪はては乙女の神のまら  
櫛の雪ぬまはなかりりり  
木とまう部を振らるる巻

士朗  
素磔  
郎青  
朗 磔

山田山田

後河原ハも和言を引かきを  
ぬくりくや出る冬の日  
少甚小神のやもあはるらん  
何をくらふともんぬ番ヶ家  
草履干はそあらあらり入丁の巻  
あをれ燈りの切くる杖系  
人良小消る斗の月 照るて  
扇の中をわし和てり  
大谷やふ山中山法閑寺  
駒も頬白も孫りまぐりき

朗 青 磔 朗 青 磔 朗 青 磔 朗 青

編張小耐く花の魚たり付  
眼を志同る喜柿の糸  
岩小せく水のやうなる意を  
膝のゆくり小志は以て  
子世等もそくくするを思ぬん  
於もくきまて喜まを菊  
風呂姿みくふの風雅を元ちじ  
露の寂蓮月のお忠岑  
落る齒を秋の名跡となるや  
柿動りん移むの意  
又第の早崎の塩焚体

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

尾並たりく笠寺の坊  
芒ちる衣小袂買ふ便く  
花とつ枇杷をくまてきりなり  
今朝くく小笠を遁れり人そま  
尼小交りておく川  
むく雲は北斗影影をかくは  
ぬるき都の賦をき書て足る  
嘗ふ十日あまりの高かりて  
この師くくする花の志る書

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

徳屋のやうと

月 浅平水鶴啼 秋の暁のこ  
海よりみよははくく 暮山  
何うくくと一押は紅のを喰て  
小麦の葉をかつくむね  
年々ぬ人の顔子を見ては  
水へ這出る 産の 遠り本  
ちつはけふ猿も衰きを喰やん  
きえく又きつと 餅のよも火  
お月と夏の襖を押やうり

素葉 岱青 羅城 士朗 岳輅 紀鳳 白圖 素葉 岱青

雲をまゐるやうハ 抱ッハ  
秋の初建物の藤系乃細く  
みうんを喰ハひより小きき  
月の朧ハ昔の人を泣きたり  
ちつとくとと 騒々々々  
名も知ぬ峰の嶺りの守りて  
加茂の社又多きうくも  
四五尺の初花梅咲おけり  
主殿の堂をわふる 糸 賣  
まを信む人はさうく 此のてり  
連衣の料又後る 素葉 糸

岳輅 士朗 素外 物裁 白圖 紀鳳 羅城 素外 物裁 方明 少如

四方山ハ書ハ親色の定りて  
 延至  
 わやろくわろく関を尋る  
 布泉  
 中葉の白ひ小向ふ花もすろく  
 素磔  
 小葉の風のりろくくくく  
 昆明  
 時としてハ水の音ささくく  
 騏六  
 洞小うらる 卧 佛 の 良  
 徐英  
 娘玄のきのふの輿を下さばて  
 岳輅  
 踏上の泥も 々 々 花  
 五絡  
 々々々 花月見の招き寄馬  
 羅城  
 花月見の老 神る 花  
 士朗  
 世の春も時も吹くく 秋の風  
 信雅  
 近

辰巳坊やうりさくく 花西  
 同 甚門  
 吟二句ハワウ玄雅近ク伊勢  
 とうての儀分のまいういやく  
 懐より言り花把園又指あるを  
 ついておもしろくはるの聯句  
 こそち入ぬ  
 山涼き伊勢の依家小文をやり  
 霍洲  
 不やして見る臺の小 小 或  
 紀鳳  
 ちりやる花ふりとりと日のくまを  
 白園  
 舟の帆ををかり出れなり  
 騏六

愛在於人而不在於物 甘棠之為  
本豈有愛哉 蓋思其芟斲為我  
園有 蕉翁手植之杉 辛亥之秋  
大風不拔 杉把之文 斲可復 培也  
伐以材之友人 墨山子懇求不止  
手造 翁像乃安其家 眉角骨相  
是謂克肖 非吾所覲 止胡謂是  
也乎

寬政丙辰二月

知足六世孫傳芳識

枕草子

開眼之俳諧

目も鼻もひらくをのへ梅の花  
 舌底を弄りてむあつる舌のそら  
 鞭あつる豹のふも長糸又て  
 手よかき浪守水の志く砂  
 升原よき山彦のひくらん  
 椽のとやめて秋ハニ　　りり  
 ひやくと月をみてやけ琵琶の音  
 宣言の候萩をわけ来　　る  
 岩橋のちうき海川と詠免やり

士朗

大魚

卧央

方朔

盛青

士峰

辨二

墨山

丈左

形くのあききゆふ　うしな  
 本菴ハとかく苗ちなる床柱  
 車のうち砂硯つめと　しき  
 かまハちる世のしきは朱依て  
 きのみの色うくも又なく  
 悲しむぬ玉の并ひあひ　並  
 筑紫の恨りうやしく　へき  
 有明しあくる春の實最落て  
 あハ我　家のりきりりり  
 古ろくと緒うづ樵のとり出  
 松の下まてはほきさくあこ

黙鳥　羅城　大鵬　帶梅　叱如　方明　大阜　玉席　朗　魚　夾

吹風も一本の花よりとむらん  
 奈良の都の夢ハ眠たき  
 うち連く屋根にたぢの葉は近  
 さもすきあつりよまき酒のある  
 一と玉の人を尋るあつりあき  
 そろりとこころふ十舟の菘菘  
 菘菘蒲白きハをのあつたを  
 多葉かき　鼻甲片あひの山  
 翠古の石をいらも捨ひ出  
 こころあつたるるるりの犬  
 先僧のいのちをらの佛よて

朔　青　峯　左　山　城　鵬　梅　如　明　阜

膳あゝふやと流せありたり  
 風のくけや流せふ津の又難れ  
 風も恋しく思ふこひ  
 陵も岸もぬれをみ萩の  
 水冷しき 産卵の 呼吸  
 抑しやんそ指たる耳のち  
 ふるまき袴の紐たむと  
 ねくふうき煙の影を  
 百年の年ふぬ  
 院と糸の人の袂に  
 杉の板戸もふ

岸 朗 魚 央 朔 青 峰 左 山 洞 里 鵬

山形井の掃除はひくと  
 灰すふきなる者とり  
 桐の葉を引くふをたる  
 おまの蒼きなるき  
 畑中よひとり家もつ暮  
 不二をさるるよさ  
 櫻咲さるるの前の八重  
 うちうさるる

梅 妙 明 阜 帛 英 士 城 喜

百韻下略

士峯 大魚り 需は 二巻にて

風羅翁のこころを悟る

瓜沙きをよめるのく向きて刻を

墨山

香華 二巻

陽炎を詠まよことの歌法師

辨二

雪うへ今必なる花のあはれを

傳芳

卷七 白

燕くと花は沈むり嵐山

曉臺

西ふ山の柳花浪のこころくし

大鵬

あつはけこやう又咲たり雪うへ

越巢

春朝の花は来て蘇へ獅子次

文岡

一筆つゝ霞き花の静をり

紀鳳

春もすうゝ花のちきりそ花枕

牛有

しやんはふらふ西をたのち白

京文左

山吹 四白

一とと花山吹ね静待花

徐英

ひとねしよ夜山吹の涙の白

大阜

やまふきのちきりきさのふの暮の春

祐之

山ふきやとちきりねも花の上

龜年

草 四白

わうまや折ふしよる人の歌

士峯

山とりの鳥宿とさきさきの子

玉席

身彩華をく沸しさかざる芒  
おとふほくと兼て松うつろし

月六句

明月や寺を照す鐘見てととり  
水引の花よりぬく二日の月  
あつては位人も有り盆の月  
あま水のかけあるうとととと  
西子見るとおひさきうととと  
りきりなきとととのたつり秋の月

梅四句

春極梅の袖色ひとそり

三所  
草池  
大魚

素外

桂五

帯梅

士崎

痛  
素梨

仙  
雄  
淵

支  
汝郎

梅うまふちあつとととのとほれ免

む免の笑墨のをしく八月の夜

梅うまふちあつとととのとほれ免

雨四句

まよふのをるくそとととと

まよふのをるくそとととと

まよふのをるくそとととと

まよふのをるくそとととと

雪三句

雪の舟ひらくと月よつれ免

上る舟とととら向ても雪の山

大魚

英士

黙馬

駸六

池此

里  
青阿

物裁

白岡

士峯



松風のこゝろふ栞や扇をうつ  
煉掃巾風よ吹く佛を  
冬の間や掃きつゝり雪の影

間水右は細く黄葉ふたは

連りきや物懐きなる

行くてくはふふたり秋の山

花を掃きゆく水も流るる

秋風のそよぐあけある龍

蝶々の心奪ふは秋の雪

湖上

魚糸の様をおきつり鳥

大魚

才明

士峯

青霞

詩栂生

尼壽松

羅城

批七終二下六

桐一葉ふちるやいとまもの  
春の夜をこぼるや相の山つき  
冬の日のはよりほろふハ飾り

岳青

岳輅

氷雲

是ハ長途のあまやうひ  
 浅子ハともりの嵐はあめ  
 たるをりふりの中よてつ  
 尾張のふま古く持借つる  
 人のしるをを 蕉翁百集の  
 手な鐘をゆきあき津まかく一重ぬ  
 今や羽をばさるるくくの結縁はもと  
 図してこよあふりゆりぬ



盛青

大魚  
士峯 撰

寛政八丙辰二月

松硯序

才海松硯といふも松ありて  
 是ハ武隈の松をさるるあちのく  
 人松松久り書留を録りお  
 踏松おつら松をさるるあちのく  
 友ハ松青うまうま切らまて

をうきすしつとすたも  
あまをよまむはつ馬のこれ  
むけやうも羅城法師ふハ  
たうらうさうりぬ

朱樹の

山朗

松の硯

夏まの月夜ハ一言くれ  
仲涼一層ふたつと花はける  
瑞牛一層ふたつハ松のまよ  
あま別てあつう小あつりあのみ  
かりあめのをよりあまあま  
まをもあまのまをとあまふり  
一日のまをハ一層ふたつ  
すしあまのまをハ一層ふたつ  
あま水鏡のうらあまのま

偉留 養雨  
左誥  
壺伯  
若人  
玄光  
碩杏  
素染  
上田 雲帯  
如毛

松七終三上林二

み〜おやをておされ〜る菴のみ  
わ〜勢〜すあるの拵〜る圍む〜る

全 羅城

ハ巢石と飲

月の出ハきのふふは〜り部々  
家のくま〜りよ〜笑のこ〜れ忘  
居ふも木村角のふ〜〜〜  
人の袴を〜〜〜〜  
世ふか〜〜〜〜  
之〜もをれ〜免〜遊ふ〜

羅城 蕉雨 壺伯 雨城 伯

批七の二上三

人運を〜〜〜〜  
今〜〜〜〜  
無に〜〜〜〜  
唐の戸を〜〜〜〜  
菊の御〜〜〜〜

多量の月〜落の摺子〜ちおひ  
ハ〜一船を〜出〜すむ〜の春  
大谷の蓋を〜焦〜〜〜  
吃の五鳥〜々 碓 後を〜り今  
お梅又〜ちき〜お梅を〜結ひ〜月

雨城 伯 雨城 伯 雨城 伯 雨城

謎くしけくをぬす こそ  
因人の琵琶もやうきききき  
障子の外ハ雪の甲斐う根  
結願しきいなる指の仮板  
一ををぬつて無きをうら  
縁ふさうる鼻のせんそ日の暮  
こけあろく移る極女 二人  
植すまきも秘の小橋を垣根め  
序をを結風のうらうら  
ゆも角も月夜をぬこのほ  
惟ま折くまの夜をむしりあ

伯雨城伯雨城伯雨城伯

批七歌三三五

人形を見くハ見ぬ九うい  
言腐をれと面やぬらうん  
ちうのわらと昔をけく秘あすは  
國をうらうらわす守うら  
栞の富よ古きいあをまきけ  
煙くそいふ 池の 水きき  
新花の興よさるまきむら  
松のすくまをうらうらうら

伯雨城伯雨城伯雨城伯

諏方湖と





山根を切りくさるるを以て  
わくわく風吹材の云  
ちきりし禱の世をのりぬ  
乙の子ハ代御坊と集す  
二枚つんころと徳も其着の妙  
富の奇くよはるるを相とく  
水もいの中一立の膝  
志のふ山の月のむくを志  
机のふま草の版とく  
唐くまき局は香の雲りて  
ひぢりま山神おろるる着解

毛 城 毛 城 毛 城 毛 城 毛 城 毛 城

紙七拾三上三五

御旗の太師もすそを  
石の苔落の物ほひく  
三尺よたぬ英はぬり  
陽の男火もひよま  
跡は苔折そつ家山刀  
いらつも糸よらふきの芽

毛 城 毛 城 毛 城 毛 城

さき草う山草をいさ  
しりあの中ましり光るの  
を初ひるる草地ハ帰  
物しり戸陽草井高田を

河く出や崎古其の黄を  
右く〜又りく〜八月甲の  
表お相の玉家信よ形を  
後へ年す〜又十月 冒善書  
まらり入ぬ

山来茶茶釋伏

南無阿弥陀佛い松ちのうも月望  
十松の〜松を〜唯〜方  
松把の志さけ〜松智の  
ぬき控〜松の古 机  
松の松風の書戸はからり

羅城 柳莊 五什 左鼻 莫二

秘七款三三六

筆力よよ〜又の〜白 雪  
山吹を〜松〜女産  
松のう〜松〜系 松  
ひも〜と砂の〜松  
を〜き方〜松  
松廢非を松の〜松  
軍の〜松の七夕の 月  
相〜松の松〜松  
松波の松〜松  
松〜松を松〜松  
松の松〜松松の松

希言 松左 文兆 凡化 杜厚 莊 城 鼻 什 言 二

出代ハ花子障々ぬものかまは  
 夕うけうけく鷓鴣あり  
 ほよあぢふ人の遠き甚とれく  
 弟はく白の体むむ一ろ戸  
 獅子子母のもよりよそのを思ひ物  
 世あろあろは肩ハ落さ  
 芦垣の一年も雲の志る一  
 若葉たれろ一ろを思ひ物  
 夕つくと雲を思ねろ灯一  
 津き出さう又ともの  
 川舟をさす汐時よわ一子

北七歌三上三九

北 左 阜 二 言 什 莊 城 化 阜 左 北

村のうらすりそりくや  
 心あゝぬ笛のを言の村の月  
 音あふ引はらきぬのよ  
 りわきを檣垣の屋よの守を  
 狐の告一井又蓋を する  
 中くよ乞食の子のかことよ  
 日の入るの浪言う 律  
 棹さすハ前を思ねろ舟をさ  
 眠りさ免さる 社 法 妻 凡

北 左 言 什 城 莊 阜 化 北

寛政丁巳冬十月

羅城記

枕七巻三上四十一

跋

ははきさのふせやをたつねてうの  
はらをめぐりつたうつらにうらむい  
のちのうけはしをわたりみすすり  
るをきえへすはしのふじををとの  
うあをいいたごとおはすてさらしな  
をさまよひよしみつてらめひり

りにいこころをすすしうして  
 ひとひととつらりいたせめんとを  
 こころにしるすきさうたのきさうは  
 またたかくつゆのらささとさにあ  
 まむせり



批七卷三上里

蘭藥鏡原 全部五卷内草之部三卷出来

此書ハ源名「獨魯傑列印」ト云フ和蘭本草集成ノ書

ヲ譯スル所ヲ金石草木鳥獸昆蟲及ヒ造醸等ノ類ニ至ルテ

一ツモ残ヌ所ナク一品ヲトニ和漢ノ名ヲ記シ其性ヲ温涼能毒ヲ辨シ其外

彼邦ニテ製煉ノ術ニヨリテ藥精ヲ取り露水ヲ製ス膏油酒醋

等ヲ製造スルコトニ至ルテオヨソ藥物ニアツカルノハ微細ニ

コレヲ論シ精密ニコレヲ辨セル可ナリコレモヨリ醫家ノ

経續ノミニアラス凡博物ノ諸君子ノ萬邦ノ名物ヲ搜採

研究スル必用ノ珍書ナリ

尾張 東壁堂主人謹識

